

きが終わるまではメンバーは生ものはたべないという。餅が搗きあがると臼が境内に出され、その中に雪と御幣を入れて千本搗きがおこなわれる。これは餅搗きの最後におこなわれる。それが終わると臼が転がされ、若い人二人がそれを転がして神社周囲を回る。この臼ころがしはかつて若い衆が餅搗きを担当していた時代には集落中をまわり、コマエといわれる年齢層の人たちがわざと臼をカワ(水路)におとし、それを若い世代であるマエガミの人たちが上げたという。

翌日の11日には朝から餅を乗せるものを藁で編んだり、エビと呼ばれる大きな注連縄が作られる。エビは2つ作られ、本殿と面堂に掛けられる。2012年の場合には10時40分に準備が整って、本殿・面堂に餅などの供物が供えられた。そののち11時30分より餅切りが行われる。これは供えた餅を正確に集落の戸数にきりわけるもので差し金を用いて厳密にきり分けられる。これを担当の組の人が分担で各家に配りオコナイ行事は終了する。

(曲谷) 2月7日がオコナイの本日だが近年では日曜日におこなわれている。2012年は偶然2月7日にあたった。曲谷でも以前は若い衆が担当していたが、かなり以前から三つの組が交代で担当することになっている。以前は5日が餅つきで7日が本日、8日に若い衆によって長持などの道具を道具を次の宿に送る宿送りがおこなわれた。また曲谷のオコナイでは笹に金銀の紙を切ったものを

吊るし、枝に餅を伸ばしたものを巻きつけたマユダマが作られたが現在ではこれは廃止されている。当は朝6時から組のメンバーが集合し準備をする。餅も現在では購入している。11時ごろに準備が整い、会場となっている公民館から白山神社まで供物を運ぶ。神社では本殿が拜殿よりも一段高くなっているが、手渡しで供物を供膳する。それが終わると年長の人から玉串の奉奠がある。この間神社の階段の下では組の女性による接待がおこなわれる。これは大根の酢の物と酒を参拝者にふるまうものである。行事がおわると集会所で直会がある。

両集落のオコナイは地域で最重要視されている行事であるが、もっとも雪の多い時期におこなわれ、この地域の環境や景観を色濃く反映した行事であるといえる。

(『米原市東草野の山村景観保存活用事業報告書』)



▲写真6 甲津原のオコナイ

## 情報BOX

◆米原市教育委員会では、埋蔵文化財活用事業として下記のパンフレットを作成しました。

「市指定史跡 峠のシシ垣」・「国指定史跡 鎌刃城跡」  
「市指定史跡 松尾寺跡」 (A4版、カラー、4ページ)

◆米原市教育委員会では、平成24年度に立命館大学文学部(矢野健一教授)と合同で、縄文時代晩期の杉沢遺跡(米原市杉沢)の発掘調査を実施しました。平成24年度の成果をまとめた下記の報告書が立命館大学文学部から刊行されました。

立命館大学文学部学芸員課程研究報告第15冊  
『杉沢遺跡 — 2012年度発掘調査概報—』

※学生が夏祭りに参加したり、子どもたちの発掘体験の講師を務めるなど、地域や学校と密接な関わりをもった社会的活動も展開されました。

◆米原市伊吹山文化資料館では、下記の冊子を発行しました。  
『伊吹山文化資料館年報15 平成24年度の活動』

◇問合せ先/米原市歴史文化財保護課 ☎0749-55-4552

## ◆◆編集後記◆◆

40・41合併号の『佐加太』をお届けします。市川先生に玉稿をいただきました■伊吹区のオコナイが改革されるということで調査に入ってくださいました■民俗文化財は変容します。流行を取り入れたり、時代に合わせて様態を変えたり■近代では、戦争や高度経済成長のもとで消えていったものもあります■米原市は民俗行事の宝庫です。これからも誌上でお伝えしていきます■さて、みなさん。来年の10月24・25日空けといてください！■全国山城サミット米原大会を開催します。鳥取大会で「やるぞー」って叫んできました(ジャンギリっ子)

米原市文化財ニュース

## 佐加太 第40・41合併号

発行 平成26年12月20日  
編集 米原市教育委員会  
〒521-0242 滋賀県米原市長岡1050-1  
米原市教育委員会歴史文化財保護課  
TEL.0749(55)4552  
印刷 ビッグバードデザイン株式会社



佐加太とは、「和名抄」東急本の坂田郡の訓を引用しました

## 米原市伊吹のオコナイ

第40・41合併号

= 特集 伊吹のオコナイ =

2014年12月20日

滋賀県米原市教育委員会

滋賀県立大学 教授 市川 秀之

### はじめに

滋賀県にはオコナイと呼ばれる年頭の行事が広く分布しています。オコナイの歴史的 성격については、いまだ明確でない部分が多いのですが、大寺院の修正会・修二会に起源をもつという説が有力です<sup>1</sup>。大寺院から地方の小寺院へと行事が広がり、かつては神仏習合によって社寺が一体化したものが多かったために、神社でも行われるようになったと思われます。しかしその具体的な普及・変容過程はいまだ解明はされていません。湖北地方では神社で行われるオコナイが多く、これは浄土真宗がこの地で強く根付いたこともあって、行事の場が神社に集中することになったためと考えられます。米原市域でも多くの集落でオコナイは行われており、筆者もかつて志賀谷・梓河内・曲谷・甲津原の行事を見学したことがあります<sup>2</sup>。オコナイの場合には供物の中心は大きな餅であることが普通ですが、米原市域の例ではそれに加え樹木にたくさんの餅をつけた餅花が作られることが多くみられます。これは今回取り上げる伊吹のオコナイでもまったく同様です。

米原市伊吹の伊夫岐神社のオコナイは立派な餅花(この地区ではマイダマ・マユダマと呼ばれる。以下マイダマと表記)が奉納されることで広く知られています。筆者は幸いなことに平成26年1月12日・13日の行事を拝見する機会を得ましたので、以下その報告をするとともに、このオコナイの変遷についても可能な限り述べることにします。オコナイは著名な民俗儀礼でありながら、その創始について知りうる事例は、史料的な限界もあって皆無です。この伊吹のオコナイは行事創始の事情とその後の変化が明瞭な事例として貴重なものといえます。なお、今回の調査は滋賀県教育委員会 矢田直樹氏、滋賀県立大学学生佐野正晴氏とともに

におこない、写真・調査データについては、市川のもののほか、参加者各位のものを参照させていただきました。ことに平成25年12月23日のしめ縄作りについては、市川は参加することができず、以下の記載は矢田氏からの提供資料に依存しています。また米原市教育委員会高橋順之氏には調査の全般についてご協力を得ました。さらに一の当の新旧トウケを始めとする地元の各位にも大変お世話になりました。皆様に改めてお礼を申し上げたいと思います。

### 調査地の概要とオコナイの組織

伊吹集落はその名の通り伊吹山の南西麓に所在しています。この場所は姉川が伊吹山中から平野部に出る場所にあたり、そのような地形から姉川に設けられた出雲井井堰から取水された用水は伊吹山麓12集落の貴重な農業用水として利用され、出雲井に隣接する伊夫岐神社も水利との関連から雨乞いの神として広い範囲の信仰を集めていました。

伊吹はおおよそ100軒からなる集落で、地区内は上流側から順に1組から10組に分けられています。オコナイは、2組ずつを1つとして5つのオコナイ組に分け、それぞれに執行されています。各オコナイ組のなかから行事の中心となるトウケ(トウヤという組もあります)を出し、準備などをします。トウケは組の中から前年の元旦祭において立候補した家が務めることとなっています。

オコナイの当<sup>3</sup>には「一の当」から「五の当」まであり、それぞれに役割があり、また宮入の順序にも関連しますが、これは後述するように前年度のオコナイ時に宮司などが籤をひいて決定しています。

### 12月23日・しめ縄作り

12月23日祝日には、しめ縄などを作る作業がト

ウケ宅で行われます。この作業もオコナイの準備の一つであるとされています。

作業には、一の当から四の当の各組があたり、五の当はこの日の作業に参加していません。トウケではオコナイ当日に奉納されるマイダマに用いるハナギがすでに用意され、庭先に立てかけられています。この日の作業では使用されません。ハナギは3mから4mの長さで、ケヤキを使用します。トウケが年末までに近くの山に入って枝振りがよいものを選んで切り出すことになっています。ハナギは切り出した根元から約50cm上部で二股に分かれ、さらに二股に分かれたものがよいとされます。

一の当から四の当には、それぞれしめ縄を作成する役割が決まっています。一の当は、地域の南側にある一の鳥居に吊るす大きなしめ縄、二の当は神社境内入口の二の鳥居に吊るす大きなしめ縄を受け持ちます。三の当と四の当はコジメと呼ばれる小さなしめ縄を担当します。三の当は神社の拝殿や手水舎などに吊るすしめ縄、四の当はトウケの門口などに吊るすしめ縄や鏡餅用のしめ縄などを分担して作成することとなっています。

各オコナイ組のトウケには、午前8時ごろに組の人が集まり、作業が開始されます。作業はトウケの農業用倉庫や座敷などを使って行われます。各組15名から20名が集まります。

藁は餅藁を使用し、各人が持ち寄り、集められます。藁の色は青いものがよいとされ、枯れた色の藁はシオンベンワラと言われ好まれません。藁は刈り取るとすぐに日陰で干すと青い藁になるといい、秋に手刈りをして保存しておくのです。

一の当では、しめ縄本体をなう作業から始まります。しめ縄の先端から約3.2mは少し細く、中央部の約5mは太く、また約3.2mは少し細くなるように藁の継ぎ足す量を調整しながら、左方向になっていきます。最終的には11mから12mの長さになるようにないます。この作業がひと段落すると、



▲写真1 網打ちの様子(一の当)

長老2人はしめ縄本体に飾る小さなしめ縄の作成に取り掛かります。

11時40分ごろ、しめ縄の作成が完成すると、組の1名が鉦を鳴らしながら、トウケを出発し一の鳥居へと向かいます。これに続いて完成したしめ縄を組員が担いで一の鳥居へと向かいます。一の鳥居に到着すると、しめ縄の中央部に、細い青竹を3本刺し、その上に小さなしめ縄を飾り御幣を立てます。紙垂と3本、5本、7本の藁縄を本体に刺しこみ、左右のバランスを確認しながら鳥居の柱の中ほどの高さに吊るします。最後に、鳥居の左右の根元に松の枝が立てられます。一同で礼拝を行い、作業は終了します。

トウケでは直会の準備がされており、一同がトウケに戻ると宮司も同席して直会が行われます。二の当から四の当も同様に、午前中でしめ縄作成と神社などに吊るす作業を終え、正午過ぎ頃から各トウケ(四の当は老人憩いの家)で直会となります。

### 1月12日・マイダマ作り

2014年1月のオコナイ調査は主に一の当を中心に見学をおこなったため、以下一の当を例に取り当日の様子を述べることにします。

朝8時前からトウケには組のメンバーが集まります。伊吹の民家は四間取りのものが多いのですが、オモテダイドコロと呼ばれる部屋を中心にマイダマ作りが行われます。一の当のケヤキは長さが290cmで、2~3日前から屋内に入れておいたものです。この日の準備はトウケの二人を含めて6人の男性で行われました。オコナイでは一般的にみられることですが、行事の全体を通じて女性の関与はほとんどみられません。最初に行われる作業は縦10cm幅4cmほどの色紙に千枚緒通しで穴をあけこよりの紐を通すことです。色紙の色は特に定まっているわけではありませんが、金や銀は避けるといいます。作業が進むと天井から紅白の紐を2本下げ、そこに結ぶ形でケヤキを天井から吊り下げます。色紙作りが終わると、土間で餅搗きが行われます。できた餅は伸ばして檜に撒きつけるのですが、先に作ってあった色紙も餅と一緒にハナギにつけていきます。この餅は外してから食べるためケヤキはあらかじめ洗っておきます。10時ごろになるとハナギは色紙と餅で美しく飾られ一連の作業は終了します。

マイダマ作りが終わる頃になると、参加者のうち年長のものが御幣を作る準備を始めます。10時45分には宮司がきて、トウケに挨拶をします。宮

司は神棚の前に御幣をおく台を設置し、半紙から御幣をつくります。11時には床の間に「伊吹大神」と書かれた掛け軸が掛けられ、その前に置かれた祭壇に御幣が置かれます。祭壇は2段で上下段ともに御幣がたてられ、その前には三方に載せたとっくりが置かれます。左側には各組に渡される三方ととっくり、右には松が飾られます。これらは後述する御幣を各組に渡すための準備です。準備が終わると宮司はいったん帰ります。

また同じ頃にマイダマに綱をまく作業も行われます。ハナギを天井につるし紐でとめます。このとき檜の中心付近に縄を五回まわしてとめます。枝を少ししぼるようにして男結びという方法でとめるのです。さらに上から50cmのところは3回、下から70cmのところには7回綱を回してとめます。このような綱の巻き方を「七五三」と呼んでいます。

12時になるとトウケの座敷に仕出しの膳が用意されます。宮司を呼びに行き参加者一同も座につきます。一番上座に宮司、その下に組長と長老、下に前年度と今年のトウケが座ります。熱燗をついで宮司があいさつし、そのあと乾杯が行われ宴席となります。

宴席はしばらく続き、14時になると今度は、各組に渡す御幣の御祓いが始まります。これは一の当で各組の御幣をまとめてお祓いするもので、各組の組長とトウケが集まります。座敷の床の間には「伊吹大神」の掛け軸がかけられていますが、その前に一番上に檜、御幣を載せた台をおき、その前に宮司が座ります。後ろには1~5組の組長・トウケが並びますが、それぞれトウケが前、組長が後ろに座ります。さらにその後ろに一の当の組員などその他の人が座ります。宮司によって神事があり、祝詞を一同は平伏して聞きます。その後宮司は檜を一同に振ってお祓いをし再び祝詞があります。2拝、1拍手、2拝ののち、宮司が御幣をまつる方向などについての説明をします。各



▲写真2 マイダマ作り(一の当)

トウケには御幣を、組長には三方を渡しますが、三方のなかには節分用の豆が入っています。各組のトウケ・組長が帰ると、一の当のメンバーは御幣を飾ります。台の一番上に御幣、2段目に鏡餅と神酒を置き前に灯明1対を立て、灯明皿に油を入れトウシミを入れ火をつけます。これを一同で拝むと、宮司は帰ります。

昼間の行事は以上ですが、夜20時にはトウケ宅で鏡番と称して組員が集まります。これはマイダマなどを守るという目的のものですが、昔は料理も出て花札などもしたといわれています。平成26年については一の当では21時からオコナイの改革についての説明と議論が行われました。

### 1月13日・オコナイ本日

この日の朝9時になるとトウケに組員が次々と集まります。床の間の掛け軸を拜んでから家の人に挨拶をします。トウケは組員にかまぼことするめを配りコップで酒をつぎます。一の当の参加者はトウケ以外に11人でした。参加者は礼服で参加します。9時15分になると宮司が来ます。宮司は服装を改め、9時半になると神事が始まります。宮司は神前に向かって2拝して祝詞をあげますが、その間、一同は平伏しています。宮司は2拝、2拍手の後、マイダマに檜を振ります。次に組員一同にも振ります。神事が終わると組の一人が鉦をたたいて集落を回ります。トウケの家の中では片付けが始まります。準備が整うと御幣・鏡餅・神酒・檜などとマイダマを家から出すのですが、御幣などは座敷の横から、マイダマは玄関から出します。家から出るときに火打ち石を打ちます。マイダマを先頭にして行列をします。5つの組は集落の中央にある札場という交差点で集合することとなっています。一の当のトウケから札場は近いのですが、マイダマは組の若い人が集落のなかを練りまわってから札場に着きます。札場には大きな灯籠があり、その前が石垣になっていますが、そこにマイダマを立て掛けます。他の組も次々と到着し、10時になるとすべての組が揃います。札場から神社へはすぐですが、一の当から順に神社へと向かいます。行列はマイダマ・御幣・神酒・鏡餅・檜の順です。鳥居をくぐって境内に入ると、本殿の周りを反時計まわりにまわって本殿の脇にマイダマを立て掛けます。他の供物などは拝殿を通して本殿に供えます。

境内では婦人会が中心となって豚汁の炊き出しをしています。境内には子どもの姿が多いのですが、子どもはお菓子を貰えることになっており、

くじ引きなどもおこなわれています。オコナイ行事は伊吹では集落のイベントとしての意味合いも強いようです。組長らは拝殿に座りますが、他の参加者は境内で豚汁などを食べています。

10時12分より神事が始まり、そののち本殿前で来年の当を決めるくじ引きがおこなわれます。一の当は宮司、二の当は区長、三の当は区長代理、四の当は農事組合長、五の当は宮世話代表が引くこととなっています。そののち拝殿では玉串奉奠が行われます。10時42分に行事は終了し、氏子総代が鏡餅・神酒・御幣などを下げます。マイダマは拝殿前の階段に立て掛けられ、そのあと組員らがマイダマの前で記念撮影をする姿も見られます。

その後も境内では抽選や豚汁の振舞が続きます。一の当では11時になると、マイダマを来年のトウケとなる家に運び、天井から吊り下げます。この家でも座敷の奥には祭壇を設け、床の間に「伊吹大神」の掛け軸をかけています。伊吹ではこの掛け軸は各家がたいいて持っているといひます。神社から下げてきた鏡餅などは祭壇に供えられます。組員は祭壇の前にすわって、組長があいさつしてから参拝します。「12時より本膳なのでよろしく」と今後の予定が告げられます。

12時前になると新トウケに次々に人が来ます。家に入ると新トウケの当主に「ごらいとうおめでとうございます」と挨拶をします。この組の場合、



▲写真3 拝殿前に並べられたマイダマ



▲写真4 シントウケでの直会

今年も女性の参加者も一名いました。以前は男性のみでしたが、近年女性だけの家庭ではこのような例もみられるようになったといひます。参加者は組長の前に2列にならびます。トウケより挨拶があり、ついで寄附の紹介があります。給仕役の二人が三段に重ねられた朱塗りの盃をもって上座の組長の前にいき、とっくりで酒をつぎます。組長は三回でそれを飲み干します。以下次々と盃をまわしていきます。盃が全員にまわるとトウケは「どうぞ召し上がってください」と述べます。次々に料理が並べられ、本格的に宴席が始まります。宴たけなわとなった14時30分頃に、組員の一人が立ち上がり歌を歌い始めます。歌はそのうち伊勢音頭となり全員が唱和します。歌い終わると組長が音頭をとって万歳がおこなわれます。トウケは重箱に入ったごぼうとこんにゃくの煮物を配ります。これは伊吹では結婚式など他の宴席でも出される料理だといひます。そのあとご飯と生のジャコがだされます。

15時になると組長が先頭になって、掛け軸を拝み「おめでとうございます」といひます。トウケは全員に鬺を配ります。これはマイダマを分配するための鬺で、17枚作りますが、セントウケ（今年のトウケ）は一番太いものを貰うこととなっています。籤の間にシントウケは御幣を神社に持っていきます。また組長は三宝やとっくりを神社に持参します。これらは神社から渡されたものであり、それを返しに行くのです。その間に膳は片付けられ、天井からマイダマが下され鋸で切られていきます。また鏡餅も切られます。鏡餅はラップに包まれて切られたマイダマにくくりつけられます。15時30分になると組員はマイダマをもって帰宅します。その際には掛け軸を拝みシントウケに礼を言って帰ります。

以上述べてきましたように、伊吹のオコナイではマイダマの作成と奉納、分配が行事の中心ですが、それを5つの組で行うことが特色となっています。次には残された史料によって、この行事の変化をみていきたいと思ひます。

### オコナイ行事の創始

伊吹のオコナイについては昭和16年(1941)刊行の肥後和男『近江に於ける宮座の研究』<sup>iv</sup>、昭和35年(1960)刊行の井上頼壽著『近江祭礼風土記』<sup>v</sup>に比較的詳細な記載があります。そして両書ともに天明9年(1789)に作成された「御祭礼略録記」を紹介しています<sup>vi</sup>。

この史料は長文ですが、オコナイについてはお

おむね以下のような内容が記されています。

- ①伊吹大明神(伊夫岐神社)は元文3年(1738)に再建されているが、その翌年の正月18日に「花乃当御神事」を初めておこなった。
- ②行事の内容は15日に神前にしめ飾りをして松をたて、16日に当座<sup>vii</sup>に糯米、小豆、酒代などをもちより、17日に当座で鏡餅や餅花を作り、18日の朝に神社に参って鏡餅や餅花を奉納し、鬺で翌年の当座を決めるというものであった。
- ③当座は2軒であったが、後に4軒になった。
- ④御鏡餅つり台・餅花・太鼓台・たたき鉦・のぼり・吹流し人足などを持つ8人は、当初は2軒の当座が雇っていたが、その後講中より出すようになった。後には人数が10人になった。
- ⑤最初の花之当のあと座席争いなどが起こり、氏子のなかで12軒が講を作り花之当をおこなうようになった。そのあとこれに加わる家もあった。
- ⑥宝暦年中に宇西峠という所に田地を買ってこれを講田とし、その小作米を取り、また糯米3俵を一の当座に納めることとなった。
- ⑦年番の当座を定め、年番当座は18日に身を清浄にして宮参りをする。
- ⑧16日の当座宅の寄合で、庄屋や年寄は心得違いのものがないか、「生死新火之者」などは遠慮すべきことなどを吟味する。「生死新火之者」とは葬式がでたり出産があったり火事があったりしたという意味であろうか。

この史料が語るように、伊吹のオコナイは当初「花之当」と呼ばれており、元文4年の神社再建を契機に始められたものです。また創始時の当座は2人で、後に4人となっています。ただこの複数の当座は、現在のようにそれぞれが別々に餅花などを作るのではなく力を合わせて一つのものを用意したものと思ひます。当然創始当初から現在と同様に鏡餅や餅花の奉納は行われていたことがわかります。また座順をめぐる混乱を契機に当初は12軒で講を作り執行していたことが記されますが、これがいつから現在のように集落全体の行事になったのかは他の史料からも明らかではありません。

肥後はこの史料を紹介したあとに「これよるとこの行ひ、実は元文四年といふ極めて近い起源を有するものであり、この点で他の行ひの発達を考える上に大に注目すべきものの如くである。」と記しています。先述のようにこの史料はオコナイの創始年代が具体的に記された極めてまれな史料です。肥後は昭和10年前後に多くの学生を動員

して膨大な量のオコナイの事例を調べ古文書も採録していますが、それをまとめたノートは現在も明治大学図書館に『肥後和男宮座資料』として残されています。その中にもオコナイ発祥の年代を明記した史料はみられません。したがって肥後が元文四年を「きわめて近い起源」と認識したのは、オコナイだけではなく他の宮座の事例を勘案した上でのことであつたと思ひます。

肥後は湖北などでみられるオコナイ行事を宮座行事の一つとして位置づけていますが、伊吹のオコナイの創始年代が近世中期であり、またそれを例外的に遅いものとする他の史料の存在が確認できない以上、オコナイと宮座の関係性についても再検討の必要があると思ひます。オコナイ全体の歴史を考える上でも伊吹集落の事例は貴重なのです。

この史料からは、伊吹のオコナイは当初より伊夫岐神社の行事として始められたことが明確で、またマイダマ(史料では「餅花」)なども当初からあつたと思ひます。近隣の村落の例を参照して行事を企画したものと考えられますが<sup>viii</sup>、これについては将来的に近隣地区の史料を渉猟するなかで明確にしていかなければいけません。

### 近代以降のオコナイ

肥後和夫『近江に於ける宮座の研究』のもととなった調査は昭和10年の夏に行われた聞き取り調査です。したがって同書に描かれた以下の記載はその当時の姿を示しています。これについては関係部分の全文を紹介しましょう<sup>ix</sup>。

「氏子一〇二戸あり、その中より一当座一名・二当座一名を選ぶ。当座あり小作米糯米三俵あるを以て行ひの費用に充てる。正月十日若者は一当座に集まり米を洗ひ水に漬ける。十一日は直径五寸・高一丈の二股の櫂を切り米玉の準備とする。十二日二当座は長浜に赴き買物をする。十三日は松切、十四日は社頭の掃除、十五日氏子各戸より米三合金拾銭を集める。十六日二当座にてしめ打。一当座これに参す。十七日は餅仕で両当座、区長、神主等が一当座に参会し餅を搗き三つ重ね三斗搗の鏡餅・五升餅の米玉を調整する。その昼食は鏡餅を作る残米にて白取と称し一白搗き小豆餅として之を食する。この小豆は一当座が負担するがその代り寄米二升を之に与へる。十八日が社参で鏡餅・餅花を供え、一同之に参列して祈年祭の祝詞を言上し、玉串奉奠あり。次いで神鬺の祝詞を奏し区長代理者神鬺を行ひ次の当座を決定する。昭和七年一月十八日の規定によれば

「当日参拝の時鏡餅神前に供え一同着席、其順位神前に向ひ左側に宮司・当屋(一・二)の順序に着席し右側は区長・区長代理者其次当番組長、以上前列し、其他組合員は後列着座す」

同書では祭の準備に関する記載が詳しいのですが、昭和10年前後の伊吹オコナイは基本的には「御祭礼略縁記」が示す近世中期の姿を踏襲しています。ただ「当屋」については一当屋一名・二当屋の2名が選ばれているとありますが、これは元文4年から天明9年の間に2名から4名になったという「御祭礼略縁記」の記述とは齟齬しています。また日程については明治6年に改暦があったにも関わらず、新暦の1月18日におこなわれており、新春の行事としての意識が強かったことがうかがわれます。

井上頼寿が『近江祭礼風土記』<sup>x</sup>を刊行したのは昭和35年ですが、調査年次は明記されていません。同書に記載されたオコナイの事例数は『近江に於ける宮座の研究』記載の数を遥かに凌ぎ、肥後の調査が集団で行われたのに対して井上の調査が単独のものであったことを考慮すると、調査には長い年月が費やされたことが想像できます。同書「はしがき」の中で井上は「私は青年の頃から此の地を好んで度々歩いてみた」とも述べています。伊吹のオコナイの記載は4組の時代のものであり、昭和17年以前に調査が行われたと考えられます。同書の記載からも、この時期には一の当から四の当が協力して、一つのマイダマを作っていたことがわかります。井上の記載は具体的で当時のオコナイの様子を彷彿とさせるものがあります。たとえば餅つきについての「手返しは早業を喜ぶ。囃子はしない。鬻へ餅をつけてほたえたというが今も空搗きをさせる。」「餅搗きの間はかがみ番とて余興に俳句や冠句をする。大正には万才もした。」などの記載は、オコナイの準備のもつ娯楽性を強くうかがわせ興味をそそります。ただ行事内容を見る限り、肥後が記載したものと同様大きな



▲写真5 3組所蔵の古文書

差はなかったようです。

オコナイの行事内容や組織が大きく変化したのはアジア太平洋戦争中のことでした。二組所蔵文書の「昭和十七年一月 祈年祭略縁起」には、この年、戦争による物価騰貴、物資不足により暫定的改正が行われたことが記されています。その概要は①当家を4軒から5軒とする②10組を2組ずつ組織して、その中で当家を定める③元旦に鬻で当家を決める④翌年の当家の順序は1月18日に鬻で決める⑤鏡餅や餅花作りは当家でおこなう⑥神酒や餅花などの負担は平等負担だが、餅のとりこ米は当家が負担する、といったものです。行列の順序などは今日と同じものが記されています。これをみると、この昭和17年(1942)の段階で、われわれが見学した現在のオコナイの姿がほぼ完成したことがわかります。またこの史料は肥後の調査から数年後のものですが、その当時の当家は4軒と書かれており、『近江に於ける宮座の研究』が記す2軒という数字にはやはり疑問が残ります<sup>xi</sup>。この昭和17年の改革は、それまで4名の当家が協力して1本のマイダマを作っていたのを、5組でそれぞれにマイダマを作る形へと変えたものでした。組という組織が基準になっているのはいかにも戦時中を感じさせますが、長さは短くなったとはいえマイダマの数を1本から5本に増やすということが、はたして物価騰貴、物資不足に対する節約となったのかは、現在の時点からみればやや疑問を感じます。むしろ戦時体制下で新たに組織された組の結束を強めるという点に重点が置かれた改革とみることができるとも思えません。

その後も組毎に改革が繰り返されたことが各組の所蔵文書に記されていますが、その大半は直会の膳の内容や負担に関するものであり、全体としては簡素化を旨とするものでした、また日程については、少なくとも平成3年には成人の日の1月15日が本日となっており、その後ハッピーマンデーの導入によって現在のように年ごとに変動する形となっています。ただオコナイの行事内容については昭和17年以降ほとんど変更がないまま平成26年に至ったのです。

### オコナイの今後

今回、私が伊吹のオコナイを見学させていただいたのは、来年からオコナイの改革<sup>xii</sup>が行われると聞いたからでした。伊吹区で作成し各組に配布された「オコナイ神事要綱」には改革の内容が詳細に記されていますが、その主要点を整理すればおおむね以下の通りとなります。

- ①1組から5組までを「1組」、6組から10組までを「2組」とし、このうち一つが綱打ちと本日の境内での振舞を担当し、もう一つの組が鏡餅やマイダマの作成などをおこない。両者の役割は毎年交代する。これによってトウケの制はなくなる。
- ②マイダマは2.5m以下とし、2本作る。
- ③それぞれの費用は各オコナイ組で負担するが、神社での振舞費用は区が負担する。
- ④綱打ちは区の倉庫で、餅つきやマイダマ作り、鏡番、直会などは集落センターでおこなう。

このようにトウケ制度を廃止し地縁的なオコナイ組が主体となって行事をおこなうことや、行事の空間を区の倉庫や集落センターなど公共的な場へと移行することは他の地区でも見られることですが、伊吹集落では少なくとも昭和17年以降、60年余り継続してきた形が来年度から大きく変容することとなります。各地のオコナイ行事が時代の変化のなかで改革を繰り返しながら継続してきたことはこれまでも指摘されてきています。伊吹集落についても過去に何度も改革がおこなわれてきました。改革をすることによって行事そのものは伝承されてきたともいえます。当然のことですが、改革や行事存続の是非の判断は地域住民に委ねられており、今回の改革についても住民の間で熱心に議論が積み上げられてきたと聞きます。伊吹のオコナイは現在でも集落全体の行事としての性格が強いのですが、今回の改革によってその性格はより強められることとなるでしょう。伊吹のオコナイの今後注目するとともに、同集落の繁栄を祈念したいと思います。

- i 肥後和男『宮座の研究』1941年 弘文堂書房など
- ii 志賀谷については  
市川秀之  
「米原市志賀谷におけるオコナイの変容」  
『淡海文化財論叢』第2輯 2007年  
同「湖北のオコナイ調査から見てきたもの」  
『人間文化』25号 2009年  
また甲津原・曲谷については  
同「東草野歳時記」『米原市東草野の山村景観』  
米原市 2013年に概要を報告している。
- iii 各組所蔵の史料には「当」「頭」の両方が用いられているが、ここでは「当」を用いたい。
- iv 肥後和男『宮座の研究』1941年 弘文堂書房
- v 井上頼寿『近江祭礼風土記』滋賀県神社庁 1960年
- vi この史料は各組の文書箱にコピーが入れられているが、原本を実見していないので、ここでは『近江に於ける宮座の研究』所掲のものをもとに紹介する。

- vii 史料のなかでも「当屋」「当座」双方の字が使われている。本稿では現在の状況については「トウケ」を用い、史料を紹介する箇所では比較的用例の多い「当座」を用いることとしたい。
- viii たとえば曲谷のオコナイではかつて色紙をたくさんつけた餅花が作られていた。
- ix 肥後和男『宮座の研究』1941年 弘文堂書房
- x 井上頼寿『近江祭礼風土記』滋賀県神社庁 1960年
- xi 『近江祭礼風土記』にも「伊吹村伊吹では『一のとう』から『四のとう』まで四組あり、主として家系によって分け、親類縁者をどれかへ巧みに付ける。」という記載がある。
- xii 滋賀県下ではオコナイの内容や組織を替えることを「改革」と称することが多い。多くは区単位での議論によって改革がおこなわれる。

## 東草野のオコナイー 甲津原・曲谷 一

市川 秀之

平成26年3月18日に国重要文化的景観に選定された「東草野の山村景観」を構成する甲津原と曲谷ではオコナイ行事が2月に行われている。双方とも近年行事内容の変容が著しいが、現在おこなわれている行事の概要は以下の通りである。

(甲津原) 2012年の場合には2月11日がオコナイで、前日の10日に餅つきがおこなわれた。かつては若い衆が行事の主体であったが、その後集落内の4つの組が交代で務めることとなり、2011年からは1・2組と3・4組が担当する形となっている。この年は3・4組が担当であった。また餅つきの場所もかつてはヤドロクと呼ばれた家を舞台としていたが、交流センター・伝承館などに場所が移り、現在は天満神社の社務所でおこなわれている。社務所の前にたてられた4本の竹の間に縄がはられ、その内側にかまどが置かれて餅が蒸される。現在では6白が蒸され、2白が面堂、4白が本殿に供えられる。かつては12白を搗いていた。搗き手は上半身テナシ、下半身ユキバカマという服装である。餅を搗くときには鉦・太鼓が鳴らされる。小太鼓1、鉦1、大太鼓2という編成である。普通は横杵で搗くが、数人でたて杵で搗く千本搗きのときには伊勢音頭が歌われる。搗きあげられた餅は板の上で平たく伸ばされる。オコナイの供物に平たい餅が供えられるのは近江では比較的珍しい。また昼食の時や来客の接待のために湯豆腐と厚揚げを焼いたものが作られる。餅搗